

2026年6月14日（聖霊降臨後第3主日、A年特定6）

メッセージ

「遣わされ、結ばれる」

（マタイによる福音書9：35-10：8）

司祭ヨセフ太田信三

主イエスの語ること、なされたことの基にはいつも、今日の福音にある、「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。」という、「憐れみの思い」がありました。憐れみと訳されているのは、「はらわた」を意味する名詞から派生した単語です。中国の故事による「断腸の思い」という言葉にもそのような感覚が読み取れますが、古代の人々は心臓を理性や意志の働く場所として考え、「はらわた、内臓」を感情の座として捉えていたようです。それゆえ、主イエスの「憐れみ」とは、腸がちぎれる程の痛みを伴うものだったと読むことができます。弱り果て、地にうなだれこむ群衆を見つめる主イエスの眼差し。その思い、共感、共苦のいかに深いことでしょうか。主イエスはその深い憐れみにより、十字架へ自らの命を差し出しました。それゆえ、十字架のお姿にはすべての人を憐れむ神の愛が満ち満ちており、天と地の間にたてられたその十字架こそが、神とすべての人とを結ぶのです。

この主イエスの役割を教会は受け継いでいます。教会の働きとは、自らの命をも差し出すほどの主イエスの深い憐れみ、深い共感、共苦の上になされなければならないのだということです。主イエスの「思い」がそこにあるからこそ、教会は「天の国は近づいた」と宣言し、その使命を果たすことができます。そのために、私たち自身が日々、主イエスの「思い」に生かされ、励まされ、変えられなければ、私たちの働きは虚しいものになってしまいます。

今日の福音で、イエスにより派遣される使徒たちは、立派な学問的背景も、弁論術も持ち合わせていませんでした。その彼らが何を伝えられるというのでしょうか。それこそ、そのようなものを何も持っていない彼らの姿そのものです。身なりや外見、知識ではなく、ただ神の憐れみに生かされ、他者を愛そうとする姿です。主イエスは、『平和があるように』と挨拶した先で拒まれたなら、その平和はあなたがたに帰ってくると言われました。なぜなら、拒まれたことで、今、不正義の中で打ちひしがれる人に共感する心が与えられるからです。その共感、共苦によって、あなたと今打ちひしがれている人は結ばれる、まことの平和がそこに生まれる、そう主イエスは言われているのです。深い相手への思い、自らもはらわたに強い痛みを感じつつする行いからにじみ出るものこそ、使徒たちが持ち合わせていたものでした。

「ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」と主イエスは言いました。すべてのものは主の賜物、と毎週礼拝で言うおきながら、それを握りしめ、自らのためだけに用いるならば、そこに「天の国」はありません。十字架上で両手を広げ、命をも差し出す主イエスの姿に倣い、私たちもまた、握りしめているものを手放し、両手を広げて歩んで行くことができますように。